



角川文庫

— 104 —

友情・愛と死

武者小路実篤



角川書店



昭和四十一年八月二十日 初版発行
昭和四十三年八月三十日 八版発行

定価百貳拾円

著作者

武者小路実篤
むしゃこうじ さねあつ

発行者

角川源義

友情・愛と死



印刷者

中内あき子
東京都豊島区高田一ノ十二

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
振替東京一九五二〇八

株式会社 角川書店
かどかわしょてん

電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

友 情 ・ 愛 と 死

武者小路実篤



角 川 文 庫

104

目次

友情

五

愛と死

一三

解説

山室 静 二三

友情

上篇

一

野島が初めて杉子に会ったのは帝劇の二階の正面の廊下だった。野島は脚本家をもってひそかに任じてはいたが、芝居を見る事は稀まれだった。この日も彼は友人に誘われなければ行かなかった。誘われても行かなかったかも知れない。その日は村岡の芝居が演やられるので、彼はそれを読んだ時から閉口していたから。しかし友達の仲田に勧められると、ふと行く気になった。それは杉子も一緒に行くと言ったので。

情 友 5
彼は杉子に逢あったことはなかった。しかし写真で一度見たことがあった。それは友達三、四人とうつした十二、三の時の写真だったが、彼はその写真を何気なく何度も何度も見ないわけにゆかなかった。皆のうちで杉子はずぬけて美しいばかりではなく、清い感じがしていた。彼はその写真を机の前に飾っておいたら、きつといい脚本がかきたくなるだろうと思った。しかし彼は仲

田に写真をくれとは言えなかった。そしてその後仲田の処へ行ってももう一度その写真を見せてもらうことは出来なかった。そして当人にも逢うことは出来なかった。一度、声を聞いたことがあるように思った。しかしそれは杉子ではなく、杉子の妹の声だったかも知れなかった。

彼が帝劇に行った時はまだ少し早かった。彼は廊下に出て今に仲田が妹をつれてくるかと思つた。それを心待ちしていたが、若い女をつれてくる男が仲田ではないとかえって安心もした。

彼はその時、村岡が友達二、三人と何か声高に話しながらくるのに出あつた。彼は村岡とはある会で一度あつた事があるが、目礼をしたりしなかったりする間柄だった。そしてこの頃は逢つても知らん顔をすることを努めていた。それは彼が村岡のものをよく悪口言つたからである。今日やられる芝居も彼は公にではないが、かなり悪口言つた。元よりそれは文学をやる仲間同志で言つたので法科に行つてゐる仲田とはほとんど文学の話はしなかった。仲田は彼が村岡のものを嫌つてゐるなぞと言うことは知らなかった。新しいものだから、それに評判のいいものだから、彼もきつと見にゆくだろうときめていた。それで説明掛りぐらいに彼をつれて芝居を見ようと言ふのだった。彼はそれに気がついてはいた。そしてそれを迷惑にも思つた。しかし断る気にはなれなかった。

彼は村岡と顔を見合せた。両方がお辞儀したそうにも見えた。しかしどっちも自分の方からさきにお辞儀しようとはしなかった。お世辞のように思われるのもいやだったのだらう。あるいは先にお辞儀して相手に見くびられるのがいやだったのだらう。少なくとも村岡は彼より四つ五つ上で、世間にももう認められていた。彼は五つ六つ短かい脚本をかいたが、誰にも顧みられなかつ

たのは事実だ。しかし彼は自分の方から頭をさげるには、相手を軽く見ていた。

とうとうお辞儀せずに村岡は通りすぎた。彼がふとふり返った時、村岡は友達と彼の方をふり返って何か言っていた。

「あれが野島だよ」

「あれか。くだらない脚本をかく奴は」

そんなことを言っているように思った。そして急に不快を感じながら顔をそむけると、向うから仲田が、妹の杉子とやって来た。写真よりはずっと大人おとならしくなったと思った。だが若々しく美しかった。

「もう、君は来ていたのか」

「ああ、少し前に」

「これが野島君だ。僕の妹だ」

二人は黙って丁寧にお辞儀した。

二

野島と杉子とはほとんど話をしなかった。杉子が芝居を感心して見ているらしいのに不愉快を感じた。しかしそれは無理もないとも思った。仲田も感心しているようなことを言ったが、それはむしろ彼にたいするお世辞のように見えた。

「やはり新しいものは、我々に近い感じがするね」

そんなことを仲田が言った時、彼は別に反対する気にはなれなかった。

「飯を食おう」

仲田はそう言って先にたって行った。三人は向いあつて飯を食った。仲田の妹は野島のいるのを別に気にはしていなかった。しかしほとんどしゃべらなかった。そして二人の話を別に注意して聞いてもいなかった。それよりは同じ齡頃の女の人が居ると、その女の方を注意しているようだった。

野島はそうはゆかなかった。彼は杉子の誰よりも美しいことを感じた。そして杉子のわきにいることをこだわらないではいられなかった。いつも仲田には不遠慮になんでも言えた彼が、今日は何一つこだわらずには言えなかった。村岡のものの悪口も彼は思い切つて言えなかった。しかし彼は心のうちによるこびを感じた。そして呑気なことばかり、いつもより調子にのつてしゃべった。それがまた彼には卑しいようにも思えたが、心のよろこびはややもすると言葉となつて、あふれ出て来た。そして杉子が少しでも笑うと彼は幸福を感じた。やがて幕のあくリンが聞えても彼はいつまでもそこは腰かけていたかった。

しかし杉子はあわてて立った。

二人もあとをついて芝居を見に行つた。彼はもう芝居は気にならなかった。ただ何げなく杉子の顔を見る機会をつくることに苦心した。ここに自然のつくつた最も美しい花がある。しかも自分の手のとどくかも知れない処に。しかし彼は杉子とは一言も話す機会をつかめなかった。ただ兄と話すのを聞いて、快活な、思ったことは何んでも平気で言う質だと思つた。そしてはつきり

ものを言う頭のわるくない女だと思った。

次の幕の間に彼は、とうとう聞いた。

「君の妹さんはおいくつだ」

「十六だ。まだ本当の子供だ。背ばかり大きいが」

「そうか、僕はもう十七、八ぐらいかと思った」

彼は本当はもう十九か、二十ではないかと思っていた。十六ならまだ安心だ。自分と七つちがいた。自分が少し有名になる時分に、ちょうど十九か、二十になっている。

彼はそんなことまで考えていた。彼は女の人を見ると、結婚のことをすぐ思わないではいられない人間だった。結婚したくない女、結婚出来ない女、これは彼にとっては問題にする気にならない女だった。

そう言う女にいい女がいると彼は一種の嫉妬しとさえ持ち兼ねなかった。女は彼にとっては妻としてよりほか、値のないものだった。結婚が彼にとってすべてであった。女はただ自分にだけたよってほしかった。

そう言う彼が杉子を見て、すぐ自分の妻としての杉子を思うのは当然であった。彼はそう言う女を求めている。そして杉子がそう言う女ではないかとひそかに思っていた。ところが事實は理想的以上に見えた。自分には少しもったいなすぎるようにさえ思えた。そして仲田が、その女を自分の妹あつかいし、馬鹿ばかにしているのをもったいないことをする奴だぐらいに感じた。

その晩、帰っても杉子のことを思わないわけにはゆかなかった。

二、三日たっても彼は杉子のことを忘れなかった。かえってますます理想化してきた。彼は自分の心の平静を失いかけた。次の日曜の朝に彼は仲田の処に出かけて見たが、杉子らしい声さえ聞えなかった。彼は仲田と話しても杉子のことには氣をとられて、つい仲田の言うことを聞きもらすことさえ多かった。そして何となくおちつかなかった。仲田とはロシヤの過激派について話していた。

「食うに困れば人間はなんでもする。日本だって今よりせめて倍も米が高くなれば黙っていたって皆、過激派になる。圧迫し切っても、どこかにすきはあるものだ。ロシヤに過激派の起ったのは当然だ。またそれに反対するものが出るのも当然だ。当然と当然がぶつかって、殺しあうのも当然だ。だがそれでますます米がたかくなるのも当然だ。この当然をどこかで切りぬけて、皆に飯を食えるようにするのが問題だ。まあ、見ているより仕方がない」

仲田はそんな事を言っていた。

「当然だが、だんだん血なまぐさい方に、加速度に進んでゆきそうだ。それも当然だ。しかしもう皆、平和にあこがれているだろう。今偉大な人間が出て来て、それが民衆の希望と一つになれば大したことが出来る。しかしそれは想像以上の事実で、ロシヤには人物もたくさんいるだろうから、今に事実によってある解決を与えてくれるだろう。その解決を与えてくれるもので、世界の思想が、大きな影響を受けるだろう。自分はレニンや、トロツキー以上の人物が今に頭をも

ちあげると思う。どこか思いもかけない処で」

野島はそんなことを言ったが、心はほかにあって、いつものように興奮することは出来なかった。何かもの足りない、何かおちつかない。彼は立ったり、坐^{すわ}ったりした。いろいろの本をもちだしてはひろいよみした。

「君はどんな人間を尊敬する」仲田は不意にそんなことを聞いた。

「君の妹さんのような方を」と彼はふと言いたくなくなったが、まさか口には出せなかった。

「僕は、やはり、正義の觀念の強い、意志の強い、信じることを行う人間が好きだ。しかし出来るだけ他人の運命を尊敬するものが好きだ。何と言ったって聖人や、神のような人は偉い、一時的の波瀾^{はらん}のために浮き沈みする人間は尊敬することは出来ない。それから慘酷な冷たい人間は嫌いだ。いつも損をしないことばかり考えているものも嫌いだ。どこかに人間の面白味^{おもしろみ}が出なければ」

この時、隣りで杉子らしい笑い声が聞えた。しかしそれはすぐ消えて、向うの室^{へや}に行ったらしかった。

「君の理想はどうだ」

「僕は迷っている。今の政治家の考え、今の法律の基礎は随分白蟻^{しろあり}にたかられている気がするよ。これからの政治家はどう手をつけていいかわからない。目的は世界中の平和、人類の幸福にあることはわかっていて、それをまた乱さずに国民の幸福を樹立しなければならぬこともわかっていて、富の不平均も、ことに食えない人間の運命を今のままにしておく事のよくない事も知

っている。しかしそれをどうしたら一番いいか、それはわかっていない。第一官吏になる気もしないし、実業家になる気もしない。学者になりたい気もするが、嵐あらしの中にじっと落着いて室にこもっているのが、本当か諷うそかもわからない。実際、今の法科の学生は自覚をちゃんと擲つかんでいる人は少ないだろう。何かに動かされてはいるだろうが、それで皆議論は多いがね」

仲田は野島がうわの空で聞いているのがわかったか、話をぶつっとやめた。

「なんでもいいさ。ぶつかればわかるだろう。皆その人のもっている価値だけきり發揮出来ないのでからね」

四

野島は昼までいて、仲田の家を辞した。杉子にはとうとう逢えなかった。彼はなんだか物足りない気がして四つ角を右に曲った。すると十五、六間さきから杉子が、生花いけばなをならいに行った帰りと見えて葉蘭はらんを油紙につつんで持って帰ってくるのに出あった。彼は不意なのでびっくりして立ちどまった。そして気がついて歩き出した時分に、杉子は近づいて来て少しほほえみ加減にあいさつした。彼もあわてて丁寧にお辞儀した。彼は何か話しかけたかった。しかし言葉は出なかった。

杉子は通りすぎた。彼は夢中で、二、三十歩歩いてふりかえった時、もう杉子の姿は見えなかった。しかしこの僅わずかなことが、急に彼を別人のように快活にさせた。

物質論者に言わすと、ここに何か知らない物質が、恋する者から厚意を見せられると、血管のなかに生ずるらしい。人はその時自ずと快活にならなければならない。野島は二十三にはなっていたが、女をまだ知らなかった。

野島はこの気持を自家に帰つてももっていた。そして誰かに杉子のことを讃美して話したい氣になった。彼はもう杉子のいる人生を罵る氣にはなれない。彼は自然がどうして惜し氣もなくこの地上にこんな傑作をつくつて、そしてそれを老いさせてしまふかわからない氣がした。

ともかく彼は日本の女のうちに、ことに自分の近い処に、杉子のような女のいることを讃美し、感謝したい氣になった。日記にこんなことをかいた。

「人生は空かも知れないが、そして色しき即是空くうかも知れないが、このよろこびはどこからくる。このよろこびを我らに与えてくれたものに、讃美あれよ」

彼は家にじっとしてはいられなかった。どこかに行かないと、おちつかない氣になった。彼は一番親しい大宮を訪ねることにした。

うちにいるといいがと思つたら、やはりうちにいた。その友は小説をかいて少しずつ世間に認められて来、彼のものよりはいつもほめられていた。この事は彼を時に淋さびしくさせた。しかし大宮との友情はそれで傷つけられるわけはなかった。お互に尊敬していた。大宮はことに彼の作物に厚意を見せ、世間が悪口を言う時は、淋しがる彼を慰めることに骨を折った。野島はそのことを思うと涙ぐみたい氣さえた。彼が当時自信のある作をあつめて本を出した時も、大宮が自分の本でも出すように骨折ってくれた。そしてその本がある人からさんざん悪口言われた時、大宮

は彼を祝して、

「君は前に復讐ふくしゅうを受けているのだ。君ほどよわらなくっていい人間はないと思う」

と言ってくれた。彼はその時、泣きたいほど大宮の友情に感じた。そして大宮を自分の知己ちぎとしてその期待を辱はづかしめたくないと決心した。二人はお互に慰めあい、鼓舞こぶしあった。もちろん、あ
る時は、お互に手きびしく批評しあって腹を立てあったこともあったが、すぐなおって、かえつ
て相手の言うことがもっともだと気がついたあとで心のうちで感謝し、なお友情のますのをおぼ
えた。

大宮は彼が来たのを喜んだ。そして今まで読んでいた内村さんの本などを見せた。大宮は内村
さんのものを愛読していた。

大宮の書斎にはイザヤの四十章の、

「しかれどエホバ俟望まちのぞむものは新あらたなる力を得ん。

彼らは驚おどろのごとく翼を張りて登らん。

走れども疲れず、歩めども倦うまざるべし」

と言う字が新にかかれてピンではってあった。野島はそれを見て充実し切った、力強い言葉だ
と思った。

五

彼はしかし杉子のことを言い出す機会がなかった。また言おうかと思うと同時に言いたくない

気もした。

二人は文壇の話や、自分たちの仕事の話や、読んだ本の話などした。そして自分たちのしなければならぬ仕事の困難な、しかし希望の多い話をした。

この時、大宮は今朝ある雑誌から小説をたのみに来たと話した。その雑誌は有名な雑誌で、その雑誌に小説を出す、小説家としての存在を世間に知られることになるのだ。

彼はその話を聞いた時、やはり少し淋しくなった。物質論者ならば、その一言で野島の脳のかに何か毒素が生れたと言うにちがいない、野島もまたそんな気がした。嫉妬、そんな名のつく。彼はそれに打ち克とうとした。また友の成功は自分たちの成功を意味するのだとも思って見た。しかし毒素はどいてはくれなかった。自分は実際自分を信じているが、彼は自信に時々不安を感じないわけにはゆかなかった。大宮はそれにすぐ気がついてたらしかった。大宮は、

「こないだ津田にあつたら君のものに随分感心していた」

と言った。この一ことは彼の毒素を消滅させるのに最もききめのある注射だった。彼は自分ながら情けないほど、他人によって自分の気分がさがりするのに気がつかないわけにはゆかなかった。彼は大宮と希望のある話をし、そして大宮の今度その雑誌に出す作のいいことを信じ、そして自分たちの勝利の道が近づきつつあることを祝した。

帰りに彼は自分の人格のあまり上品でないことを反省した。自分は杉子の夫に値しないものだ、勉強しなければと思った。

彼は自分にたよるものを要求していた。自分を信じ、自分を讃美するものを要求していた。そ